〈共同研究報告〉

公衆衛生と「花苑都市」の形成
――近代大阪における結核予防に関連して

竹村民郎

第一章　田園都市と関一の都市計画

ハワードが必要としたことは――これは同時にクロポトキンが宣言したように――都市（タウン）と農村（カントリー）の結婚であり、農村にある心身の健康と活動性と、都市の知識と都市の技術的の便益と都市の政治的協同との結婚であった。この結婚の手段が〈田園都市〉であった。[1]

この「心身の健康」とは言うまでもなく、工業化と都市化にともなう当時の都市の不衛生な環境を批判しているのである。拙論において意図するところは、ハワードの田園都市運動の影響をうけた我が国の「田園都市」形成と公衆衛生との結合の問題をあきらかにすることによって、都市の公衆衛生の本質と性格の見通しを得んとするものである。しかしこの課題が俎上に載せられて論議の対象となるようなことは、これまでほとんどなかった。曾て私はこの問題の重要性に着目して、拙著で研究の方向を明らかにしてきた。[2] 当時のことを考えれば、いったい我が国の「田園都市」というものは何であったのだろうかという問いと、新史料渉猟とを重ねていたことが思い出される。そうして出来たものも、学界の議論をよぶことはなかった。二〇〇七年、鈴木貞美国際日本文化研究センター教授がライフワーク的大著である『生命観の探究―重層する危機のなかで』（作品社、二〇〇七年）の三六四頁にあたるところで、拙稿「文化環境としての郊外の成立」（一九九八年）をとりあげ、「田園都市」と健康との統合についてのとらえ方を評価された。鈴木教授と私との問題意識の距離は近くなったというべきであろう。この拙論について言えば、そうした鈴木教授の研究に触発されたことに負うところが多いのである。

つぎに本論文が必要とする限りにおいて、エベネザー・ハワード（Howard, Ebenezer 一八五〇―一九二八）の田園都市運動について、簡単に説明しておこう。田園都市運動の最初は、産業革命を最初に経験したイギリスに起こった。一八九八年、ハワードは『Tomorrow: A peaceful path to real reform』を刊行し、ロンドンなどの大都市の弊害を除くために、その周辺に多くの田園都市を作ることを提案した。第二版は若干改訂され、『Garden Cities of Tomorrow』と改題して、一九〇二年に刊行された。その提案の基調は、第一に人間の健康で便利な生活であり、調和のあるコミュニティの輪郭を描いたことである。第二にコミュニティはあまり大きくなく、田園に囲まれ、土地は個人投資による株式会社が所有し、すなわち株主たちが土地を共有し、同時に農工・商の生産と流通手段を所有する共同体を経営した。第三に田園都市運動は一九〇三年、第一田園都市株式会社が創立され、ロンドン北西約五〇キロメートルのレッチワースにユートピアを実現させた。イギリス以外においても、田園都市運動によりヒルベルスム（オランダ）、フランクフルト・アム・マイン（ドイツ）、ラドバーン（アメリカ）等が建設されている。第四にハワードの田園都市構想は産業革命の生んだ近代的大都市の否定から出発している。したがって、あまりに非現実的な側面が強かったことは否定できない。しかしその田園都市論は、当時の都市化にともなったさまざまな弊害（大気河川などの汚染、騒音の増大、居住環境の悪化など）に悩む人々にとっては、まさに電気鉄道時代の新しい福音として、全世界的な関心事になったのである。第五に一九三八年、文明史家ルイス・マンフォード（Mumford, Lewis, 一八九五―一九九〇）は、流石に鋭くその著書『The Culture of Cities』のなかで、田園都市を飛行機とならんで二〇世紀初頭の二大発明と評価している。(3)

ところで田園都市運動は二〇世紀初頭、我が国においてはどのような影響をあたえたのであろうか。一九〇七年、内務省地方局有志編で『田園都市』という書籍が出版された。この書籍が刊行された背景には、明らかにイギリスの田園都市運動の影響があった。事実、内務省地方局府県課長井上友一、嘱託留岡幸助、生江孝之らは、一九〇三年と一九〇八年にイギリスの田園都市レッチワースの実地踏査を試みている。しかし、内務省地方局有志は田園都市の理想像を、欧米の田園都市にもとめるよりむしろ日本古来の都市、農村における田園趣味の定着のなかにもとめた。なぜならば本書第十三章が示すように、古の無名の「田園都市」「花園農村」は「おのずから田園の趣味をおび」自然との共生を実現していたからである。そして彼等は都市問題の解決と農村改良をすすめる道は、たんに欧米の田園都市の成果を受容するにとどまらず、むしろ積極的に日本古来の田園趣味の精神を継承することであると主張した。なぜこうした方向が強調されたのであろうか。それは近世以来国際的にみても第一級の土地生産性をあげ、独自で農村のユニークなクローズドシステムを実現した我が国としては、大西洋経済圏と結合して資源浪費型

生活システムを確立し、世界のトップクラスの労働生産性を実現してきたイギリスのごとき国家の都市再生の方向はなじまないということである。さらにいうならば、当時先進資本主義国イギリスに猛烈な勢いでキャッチ・アップしていた我が国としては、欧米における高度な都市計画の水準をじかに採用することは当然に躊躇されたのである。内務省地方局有志の指摘するところによれば、古来の田園趣味の精神を継承した優れた生活環境と美しい風土をもった町村は、滋賀県五個荘村（現東近江市）、広島県賀茂郡坂村（現安芸郡）、愛知県海東郡甚目寺（現海部郡）など、全国的にひろく散在していた。内務省地方局有志が田園都市運動について考察する過程で、古来美しい自然文化経済圏を形成してきた我が国の村々の伝統と、近代欧米の都市計画とを融合するパラダイムを提起していたことは、きわめて注目すべき点であろう。

一九一一年、床次竹二郎内務省地方局長は「都市膨張に伴ふ諸問題」と題した論文を内務省地方局から刊行した。床次は同論文の一二頁で、イギリスの住宅問題についていう。

> 最近最も多く世人の注意を喚起したるは『田園都市（ガーデンシティー）』又は『花園農村（ガーデンサッパーズ）』の如き一種新式の施設に在り。其眼目とする所は、何れも細民の為めに、住居難の宿題を解決せんとするの企てにあらさるなし。

『田園都市』――「都市膨張に伴ふ諸問題」の線から明瞭に読みとれるように、内務省地方局の都市問題研究は、もっぱら「田園都市」「花園農村」という二つのテーマに集中していた。いま「田園都市」というが、実は二〇世紀初頭、全国一の工業生産額を誇り、最大の都市であった大阪市の都市政策においても「田園都市」が強くイメージされていた。一九二三年に刊行された関一大阪市長の著書『住宅問題と都市計画』には次の如きことが言われている。

> 今日でも英吉利（イギリス）の都市計画の中心になって居る思想は衛生の問題であって、都市計画を管理して居る官庁は保健省であると云うことを以て其特色を知ることが出来る。保健政策と共に見逃すことの出来ないのは都市計画と住宅問題の関係である。……思うに各国の都市計画を通観するに其根本の観念として二種の傾向を認めることが出来る。第一は都市の交通運輸の利便を増加すると共に街路広場の配置構成に重きを置き都市を美化し偉観を増すことを主とするもの。第二は市民中の下層階級に愉快にして健康なる家庭（ホーム）を与うることを目的とするものである。欧羅巴（ヨーロッパ）大陸諸国殊に仏国巴里（パリ）の大計画は前者であって、北米合衆国の都市計画も之に属する。然るに英国の都市計画は全く保健政策住宅政策を中心として居るものであって英国では住宅問題を離れて都市計画を説くことは出来ない。……又英国の都市計画は主とし

て将来発達すべき市外に対してのみ将来の統一的計画を立てる傾向がある。仏蘭西（フランス）又は米国の都市計画は都市の既成部分の統一的改善を骨子として居るものであって此点も著しく違う。此相違も英国民の性質に基づいて居るものであって田園都市の運動と都市計画の関係に就て考えて見れば略々諒解し得る。ハワードの田園都市の理想は其儘には実現することは困難であるが、田園都市が田園郊外となり、都市計画となって住宅改良を促したことは疑を容れないことである。此点に於いてはハワードの功績を偉としなければならない。[4]

ここに示されてある欧米の都市計画、就中フランスのナポレオン三世及びオースマンによる皇帝の権威を増大させることを目的としたパリ改造に対して、関市長は賛意を表さず、「下層階級に愉快にして健康なる家庭（ホーム）」環境の提供を目的とするイギリスの都市計画―田園都市の「理想」を評価している。それはこれまでの我国における官僚的、産業優先的な都市計画から「アメニティ」の創造を基調とした都市計画への転換をうかがうに足る充分な言説である。ここで簡単に関一（一八七三―一九三五）の経歴を紹介しておこう。関は一八九三年、東京高等商業学校卒業、九七年母校の教授に就任している。教授在職中は鉄道論、交通政策、工業・社会政策等を研究し、社会政策学会においても、関は福田徳三、高野岩三郎等と学会を指導した。又彼は友愛会の創設と発展に力を尽した。関の都市計画の目的は「住み心地よき都市」に尽きる。都心をビジネス・商業地域として開発、その間に緑地、公園を配置し、都心と郊外を高速鉄道で結ぶ、というイメージである。ここに詳述する余裕はないがこのほか関の功績は市域拡張による「大大阪」の建設、中下層階級のための清潔で衛生的な住宅の建設や、救貧事業の市営化、地下鉄建設、メインストリートである御堂筋建設、中央卸売市場建設、学制統一、商科大学の創立など枚挙に暇がない。関は激務の傍ら名著『都市政策の理論と実際』（三省堂、一九三六年）を刊行したほか、大阪都市協会刊行の雑誌『大大阪』にも数多くの秀れた都市政策や社会政策についての論文を寄稿した。関が戦前の名市長と称される所以は、まさに都市情報の発信と交流に対する明確な自覚をもっていたからである。二〇世紀初頭、工業都市大阪は「東洋のマンチェスター」と称されていたが、同時にその栄光の裏面には「煙の都」という烙印が押されていた。目覚ましい大阪の工業化、都市化は、世界に類例をみないほどの大気汚染や水質汚濁、結核死亡率の増加、密住住宅地区の拡大等に象徴される都市環境の貧困をまねいた。ここに大阪市は、市民本位の「住み心地よき都市」か、集権主義と街路主義か、この二つの方向の分岐点に立っていたのであった。大阪市民はこのときにあたり、「自治観念」の発露と都市の科学的知識の涵養によって、「住み心地よき都市」の実現に寄与しようとし、中央集権主義と街路主義に対抗し「都市自治権の拡張」を実現するために、関市政を支持したのである。[5]

もちろん、私が今問題にしようとしている関市長による都市計画の実施にあたっては、最終決定権は中央政府にあり、必ずしも関のヘゲモニーが貫徹したとはいえない。例えば御堂筋の建設など市街地の再開発を目ざした第一次都市計画事業は、関市長自ら述べた如く道路中心の「過去の誤謬訂正事業」であり「何らの新味もなければ創造もない」ものであった。或いは政府の厳重な行政監督や起債の許可制度によって、市営事業の正常な発展が妨げられたごとき、そうした面を強くあらわすものである。[6] だが、それにも拘わらず関市長の「住み心地よき都市」の創造は、近代都市の通弊ともいうべき腐敗堕落より大阪市を救い、政党に干渉の余地をも与えず、著しく公正明朗なものを持っていたことを知らなければならない。私が敢えてそのように言う意味はほかでもない。関市長による都市の構造改革の主体が、集権主義の官僚体制の側から出たのではなく、市民自治に基礎を置いた都市計画大阪地方委員会にあったことに注目するからである。そしてこの委員会の専門委員グループが「住み心地よき都市」のビジョンを共有して覇を競いあい、「大大阪」建設のヘゲモニーを握っていったからである。関市長による都市計画の実施を中心として、今述べたような都市計画大阪地方委員会の専門委員が具体的に舞台に登場して、どのように行動したかを仔細に検討することは、本稿の課題に一つの鍵を与えるものであろう。都市計画大阪地方委員会において、建築家片岡安博士と共に委員中最古参者として、公衆衛生の立場から参与した佐多愛彦大阪医科大学学長を本稿においては考察の対象としよう。ついでに書き加えておくと、片岡安博士もまた大阪府衛生会において、イギリスの結核死亡率が二四年前と比較すると三分の一に減少したのは「職工家屋の建築法案が出来て公私力を協せて貧民家屋の改築に熱中した結果」であると述べて、公衆衛生の整備のために田園都市の計画と貧民家屋の改築を重視していた。[7]

そこで佐多愛彦（一八七一―一九五〇）の略歴をみよう。佐多は鹿児島県の日本松に生まれた。一八八八年、県立鹿児島医学校卒業。九〇年、東京帝国大学撰科（外科学、病理学）卒業。九四年、大阪府立医学校教諭に就任。翌九五年、北里柴三郎博士経営の伝染病研究所に入る。九七年、ベルリン大学及びフライブルク大学に留学。ウィルヒョウ教授及びチーグレル教授の下で病理学及び細菌学を学ぶ。一九〇〇年、帰国後医学博士の学位を受ける。一九〇二年、大阪府立医学校長兼病院長に就任（一九〇三年、大阪府立高等医学校と改称。）。一九〇七年、大阪血清薬院創立。一九一六年、肺結核療養所建設準備委員就任。一九一七年、大阪市立刀根山病院（刀根山結核療養所）設立とともに、研究の指導にあたる。一九一七年、竹尾結核研究所所長に就任。一九一九年、大阪医科大学長兼大阪医科大学教授就任、一九二〇年、都市計画大阪地方委員となる。一九二四年、大阪医科大学長辞任。一九三〇年、第八回日本医学会開会に際し会頭として会務を主宰。一九五〇年、七八歳で逝去。

右の佐多の経歴が示すように、彼は我が国における肺結核の研究

と診療の第一人者であった。彼はまた府立医学校が府立大阪医科大学に昇格するときに尽力し今日の大阪大学医学部の基礎を築いた。小松病院理事長小松良夫が、森鷗外と佐多の間に交際があったことを、森鷗外の日記を引用して指摘しているのは興味深い。[8]

第二章　「花苑都市」と大阪の名医たち

阪神電気鉄道株式会社（以下阪神電鉄と略す）が大阪－神戸間の電車営業をはじめたのは、一九〇五年四月一二日である。阪神電鉄営業開始の約二年半後、前述した内務省地方局有志編『田園都市』が刊行された。阪神電鉄ではそのわずか三週間後、一九〇八年一月一日付で『市外居住のすゝめ』を出版した。同書は一四人の大阪を代表する名医による数回の講演会をもとに刊行されたとすると、『田園都市』の直接的な影響で製作された可能性は考えられない。同書に寄稿した名医たちの論文はいずれも阪神間の健康地への移住を積極的に奨励している。編集者の阪神電鉄の高田兼吉は「あとがき」で、名医たちの講演を聴き「市内居住の害と市外居住の利とに就き大いに会得する所がありました。」と述べている。つまり同書の製作にとって、大阪の名医グループの役割が極めて大きかったということである。しかし阪神電鉄がその鉄道沿線の宣伝とはいえ、全国に先がけて同書を刊行した事実は、都市生活の既成概念を壊し新たな郊外という健康地を創造する方向を示唆するものがあった。しかもイギリスならびにヨーロッパ大陸諸国における田園都市建設運動が展開しつつあった新時代の潮流と、そうした点でも共通項をもつものであった。だが更に注目すべき点は、大阪の名医グループの中心人物が、前述した佐多愛彦大阪府立高等医学校長であったことである。当時佐多は年来の結核研究を基礎として、これまでの病理的および細菌的の結核研究を拡張して臨床的研究を推し進め、我国における最初の肺癆（肺結核）科教室を開設した。肺癆科教室開設と郊外に衛生的な健康地を求める主張を考え合わせれば、二〇世紀初頭におけるその立場をいよいよ明らかにするものであろう。佐多は『市外居住のすゝめ』の巻頭論文において、つぎのように述べている。

> 維新此方、殊に最近十数年来大阪市の発達は非常なるもので、商業は申すに及ばず、工業の発達は殆ど日本に冠絶し、英吉利（イギリス）のマンチェスターをも凌ごうという有様で、所謂煙突林立煤煙天に漲り、我々の呼吸する限りの空気という空気は煤と埃との固りである……大阪の統計は如何であるかというに……三十八年（一九〇五）の統計に依ると大阪府の人口は、市郡合わせて一百九十一万三千四百五十五人で中大阪市のが一百六万八千七百七十一人、郡部全体のが八十四万四千六百八十四人である。……市の全死亡者は二万三千二百二十八人、其内で呼吸器病は依って倒れましたる者六千二百二十五人、即ち全死亡者の四分の一は呼吸器病で倒れた割合である。夫れで此呼

吸器病の中で肺病は如何かというに三千九百四十四人、即ち全死亡者の六分の一以上に当って居る。……今日の如く漸次市外交通機関が発達いたしまして数十分乃至数時間程の所に愉快なる田園があることとなりました以上は、何を苦んで此煤煙多き都会の地に永住の愚を敢てするの必要があろうか。私は斯る単純なる理由からしても、諸君に事情の許す限りは田園生活に付かれたい。勤務時間の外は成るだけ早く此塵埃多き空気より遠かられたいということを切に勧告したいのである。(9)

佐多が指摘しているように、二〇世紀初頭、大阪市では肺結核の蔓延は特に顕著であった。『大阪市統計書』などによると、市内の「呼吸器病ノ内肺病死亡数」は一八九二年にはすでに一四九五人を数え、日清戦争後の一八九七年には二七九〇人、日露戦争を経て一九〇七年には四〇一三人となった（表参照）。コレラや赤痢は流行の際には著しい数の死亡者を出すが、肺結核は二〇世紀に入って毎年三〇〇〇人以上の死亡者を出した。ここで注意しておくと、結核のうち、その多くは肺結核である。しかし実は結核は全身病である。肺以外の結核で比較的多いのは、脊椎カリエスなど骨および関節の結核や腎臓結核、腸結核などで、このように全身どこにでも結核性の病変は起こりうるのである。二〇世紀初頭、都市における肺結核の流行によって、我が国において結核がはじめて大きな社会問題となった。内務省は一九〇四年二月四日、内務省令第一号をもって「肺結核予防に関する件」を発布し、四月一日より実施した。大阪でも同年四月二日、府令第三七号をもって「肺結核予防細則」が出され、翌三日付で「告諭第一号」が発せられた。「告諭」は第一条において、患者用の痰壺を配置すること、第二・三条では患者の衣服、寝具、飲食器具等の消毒の実施等を定めている。いずれの条項も肺結核の蔓延は主として患者の喀痰に因るものという認識から出たものであるが、その条例の主要な内容が痰壺の設置であったことから、巷ではこれを「痰壺令」と揶揄した。当時消毒的清潔法は保健制度の実施上最重要の事項ではあったが、肺結核の蔓

表　大阪市内死亡総数に占める肺病死亡者の割合

	死亡総数	肺病死亡数	同百分比例
1892年	11,841人	1,495人	12.62人
1893年	12,539人	2,011人	16.03人
1894年	11,681人	1,617人	13.84人
1895年	13,525人	1,790人	13.23人
1896年	11,103人	1,764人	15.88人
1897年	18,575人	2,790人	15.02人
1898年	18,343人	2,961人	16.14人
1899年	19,012人	3,415人	17.96人
1900年	18,250人	3,017人	16.53人
1901年	19,072人	3,588人	18.81人
1902年	20,721人	3,739人	18.04人
1903年	20,891人	3,351人	16.04人
1904年	20,910人	3,470人	16.59人
1905年	23,205人	3,965人	17.08人
1906年	20,793人	3,376人	16.23人
1907年	24,053人	4,013人	16.68人
1908年	24,736人	3,913人	15.81人

（注）村上栄次編『大阪衛生百年史－大阪府衛生会・健康の里の軌跡－』上巻、大阪府衛生会、1994年、247頁の表より作成。『大阪市統計書』等を参照。

延という現実を前にして焼け石に水というのが実状であった。その中で佐多が都市環境改善と公衆衛生の視点に立って、市外居住の必要性を訴えたことは、こうした現実を変化させる大きな契機となるものであった。就中、佐多は後述する共同執筆者緒方銈次郎、高安道成等と共に、阪神間に土地、別荘を所有していたこともあり、健康地への移住についての訴えかけは、最も説得力があった。佐多が阪神電鉄開通当初から所有していた芦屋の約二万坪は、この当時、住吉観音林や雲雀丘の土地開発を実施していた日本住宅土地株式会社社長阿部元太郎に委託され、一九二八年から分譲されている。

関西における近代医学の祖と称される緒方洪庵直系の医師である緒方銈次郎は、住吉の別荘を例にあげて、つぎのように阪神電鉄沿線の理想的な健康地に、阪神電鉄が貸家経営することを要請している。

> 盛夏には子供の海水浴、厳冬には両親の避寒地として共に非常の好結果を挙げた。……私も休日毎に電鉄を利用して此処に遊んで居るが、此処にさえ来ると心身頓に爽快を覚えて積日の疲労を忘れ新しい勇気を養うことが出来る。其処で自ら以て衛生上の最適地と信じて居る……阪神電気鉄道会社にて市外居住を勧めらるる以上は一層奮って此付近の健康地を購い、市内に通勤する人士の為に衛生に適したる家屋を建設し、之を相当なる価格を以て貸与する方法を建てられたならば如何であるか。[10]

堀見克礼大阪府立高等医学校教諭、同医学校病院内科医長もまた寄稿論文のなかで「沿線各所適当の地を撰んで阪神電鉄の模範村を建置し万般の設備を完全にすること」「阪神電鉄模範村購買消費組合を設け会社の直営とすること」を提言していた。[11]

堀見が言うとおり、市外居住者にとって重要なのは、合理的家賃と日常用品の安価なこと、病院・学校などが整った郊外住宅地であって、それが実現されなければ、市外居住は全く意味がないものとなるのである。住宅・土地の購入にしても、それが市外居住者の家計にあたえる影響は極めて大きい。それらは個々の移住者の負担では到底出来ることではなく、阪神電鉄の積極的な住宅地経営によって補えるものであろう。むしろ阪神電鉄による模範村経営によって市外居住の実行者の増大を生み、電鉄経営を安定させることもできることになる。高安道成高安病院長も「阪神電鉄が開けてから、今まで大阪神戸の中央に住った所の人々が、続々この電鉄沿道の地に移住し、電車にて日々大阪乃至神戸に通うと云う風が流行して来るのを見ても、啻に経済上の利益のみではなく、衛生上尠からぬ利益あることが都人士に解って来たことが察せらるゝのである。是れは自分も誠に良いことで大いに奨励すべきことであろう」[12]と述べていた。高安道成が経営していた高安病院は、大阪市東区道修町四丁目に位置する大阪で二番目に古い私立総合病院であった。妻安子は初め明星派、後にアララギ派の歌人で、才色兼備の社会事業家、そし

て大阪社交界の名流婦人であり、絵画、革工芸、染色等の芸術家でもあった。[13] 彼女の父清野勇大阪医学校長は一八九四年、佐多愛彦を大阪医学校教諭に招いた。参考のために記しておくと、清野も「虚弱者は須らく市外居住を断行せよ」と題した論文を、「市外居住のすゝめ」に寄稿している。つまり『市外居住のすゝめ』の共同執筆グループである佐多―清野―高安は深い絆で結ばれていたのである。

以上、大阪の名医グループによる阪神電鉄沿線への移住のすすめを見てきた。二〇世紀初頭、大阪、神戸等の大都市居住者の間に、阪神電鉄の営業開始を契機として、阪神間の健康地への関心が目覚ましく高まってきたことは、当時のジャーナリズムの報道をみても明らかである。例えば当時大阪で刊行されていた『郊外生活』と題した新聞は、一九〇九年一一月一日付の紙面において、柳病院長柳琢蔵の郊外移住を推薦する論文を掲載していた。『郊外生活』はタブロイド倍版四頁、毎月二回発行、定価郵税とも一部三銭、発行所は郊外生活（大阪府西成郡勝間村）であった。『郊外生活』は小さな新聞であったが、その名のとおり郊外生活についてのさまざまな情報を掲載した新聞であった。柳はまず不健康な市中で終日繁雑な激務に従事する市民は「此不衛生な境を脱出して新鮮な空気を呼吸し山を楽み、水を楽み清新活潑なる元気を恢復する必要がある。」つぎに郊外生活を志す市民は「電鉄沿道至る所」にもとめられる「健康の地」をみずから選ぶことである。しかし、市民を引きつける「健康の地」の条件が重要である。第三点目として市民は「北は山を負ひて寒風を防ぎ、南は海に面して涼風来り、冬は暖かにして夏涼しく、大気清浄且オゾンに富み、海水清澄、漁獲多く、山水明媚、風光に富み、四時風の方向宜しき上に、交通至便」の地を選ばねばならない。つまり柳は右の文章のなかで「健康の地」として、温暖な気候、そして北に六甲山が位置し、南は大阪湾を望む立地条件と、郊外電車の便もよい大阪―神戸間の地を推奨しているのである。鈴木貞美教授は柳院長の文章に関して述べられて、ここには伝統的な養生思想・道教の「元気」の観点がやや復活していると指摘している。[14] 伝統的な養生思想や「元気」の復活は確かに時代の一つの潮流であった。佐多もまた一九一四年一月刊行の阪神電鉄の宣伝誌『郊外生活』に「都住居は三代にして滅びる」と題した一文を寄稿して、郊外生活における鍛錬と養生の必要を、つぎのように述べている。

> 誤られたる衛生思想に由って其本義たる健康たる鍛錬を閑却して置きながら、之だけ衛生法に適った生活をしているのに何故身体が思わしく健康にならぬかと、不思議に思っている人もあります。……怪しむべきは郊外居住者が単に居を郊外に移せば事足れりと考えている様の風が其行動に見受けられる事であります。例えば郊外に住宅を求めるにも、広々とした海岸や山間に閑静なる家を探そうとはせず、成るべく便利な、家の沢山ある村落ばかりを探ねるが如き。……或いは暖房を装置して外に健康なる空気の流通を途絶し、内に温気の習慣を養うて皮膚

を軟弱ならしむるを知らぬが如き、飲食物はその地方の所産を採らずして多く都会生活と同一の物を採るが如き、皆之郊外生活に由りて心身の修養を図り、鍛錬を期し、向上を得んとするの目的とは全然相反した行動であると云う事が出来ます。[15]

肺結核予防のために最も有効な郊外移住が一大転換期にさしかかり、養生観が劇的に変化していた二〇世紀初頭に、佐多が「飲食物はその地方の所産を採る」ことを指示していることは実に興味深い。事実こうした「身土不二」をスローガンとした「地産地消」の食養生運動は、二〇世紀初頭の頃から、福井県出身の石塚左玄等によって始められている。[16] もう一つ書き加えて置くと、「心身不二」に関しては、同じ頃に岡田虎二郎の静坐法が目覚ましく普及している。[17] キリスト教社会主義者で作家の木下尚江も岡田の熱心な弟子の一人であった。一九〇九年一月一九日、阪神電鉄の取締役会は、「西宮停留場構内空地ニ貸家建築ノ件」を正式に決議した。同年四月二三日の株主総会で決議を説明した今西林三郎専務取締役はつぎのように述べた。

市外居住トカ田園生活トカ云ウコトガ流行シテ参リマシテ、皆空気ノヨイ所ヘ移ルト云ウ形勢デアル。当社ハ予テ貸家ノ周旋ヲシテ移住者ヲ勧誘シ、其希望者ニハ一々案内ヲシテ荷物ノ運搬モ引受テ便利ヲ図ッテ居リマスガ、兎角家賃ガ高イカラ移住セヌ又家賃ガ安ケレバ移住スルモノハ多クナル見込デアリマスカラ幸イ、西宮ニ空地ガアルノデ建築シタノデ、大阪ナリ神戸ナリノ家賃ヨリ割安クシテ貸ス積リデアル。普通ヨリ以上ノ立派ナモノヲ建テ一般ノ模範的ニナレバ他ノ家賃モ低下スル。左スレバ自然移住者ガ多クナル訳デ、先ツ西宮ノ成績ガヨケレバ追々他ニモ増築スル積リデアリマス。今カラ申込ガ余程多イ、最早満員ノ姿デアル。[18]

西宮停留所前の三二戸の貸家は一九〇九年九月に竣工した。阪神電鉄は続いて鳴尾村に六四戸の貸家を翌年九月に落成した。これらの郊外住宅地経営は阪神電鉄による沿線開発の一環であるとともに、前述した大阪の名医グループによる情報と提言もあって、実現されたとみるべきであろう。阪神電鉄はこれより先の一九〇五年、私鉄業界の先鞭をきって、芦屋の打出海水浴場を開設した。これは沿線居住者の健康増進のためであったのみならず、乗客誘致の策略でもあった。当時、海水浴は前述した緒方銈次郎の文章も示すように、その健康効果に医学界が注目していたのみならず、ひろく一般大衆の間にも新しいスポーツとして目覚ましく広まっていた。一九一六年、阪神電鉄は遊休化していた鳴尾競馬場の活用を図り、陸上競技場と、プールを備えた鳴尾運動場を開設した。完成後の同年一〇月に第三回極東オリンピック大会の予選会が行われた。鳴尾運動場には野球場が附設されていた。一九一七年八月、大阪朝日新聞社主催

の全国中等学校優勝野球大会の第三回大会が、箕面有馬電気軌道株式会社（以下箕有電軌）の豊中球場から会場を鳴尾運動場に移転して開催された。この鳴尾野球場は一九二四年八月の甲子園球場開設後に閉鎖された。なお一九一九年、鳴尾のプールで帝国水友会主催の全国競泳大会が開催されている。二〇世紀初頭、「広軌高速」の都市間電気鉄道のパイオニアから、郊外住宅地経営とレジャー施設開発へ、阪神電鉄は飛躍をかけて、巧みに変身しつつあった。この変身には生活の健康化と田園趣味の潮流が追風となった。一九二二年、阪神電鉄社長三崎省三は甲子園の開発を始めた。甲子園と言うと、現代人は甲子園球場を思い浮かべるだろうが、当時甲子園は枝川・申川廃川敷地を中心とした狐か狸の里であった。さて四二万坪以上の甲子園の開発はどのように計画されたか。当時阪神電鉄から開発の技術的相談をうけた大屋霊城は「二つの花苑都市建設に就いて」上で次のように述べている。

> 花苑都市と云うのは一寸当たらぬかも知れぬが一方遊園地を造って人を呼び他方気持のいい住宅街を設けてそこに割合に沢山の人を住ませ一種の田園都市風に施設しようと云うにある、……茲に『花苑都市』と云う言葉を選んだのは田園都市と云えば社会政策的の意味の加わった所謂ハワード氏のガーデンシチー風に考えられる虞れがあるので田園と云う字を用いず又遊覧都市と云へば例えば奈良、京都の如き名所の遊覧を以て人を集めこれによって立って居る都会の如き感じを与へ余り面白くないのでよした訳である。又花園都市と云ってもよかろうかと思うが花園と書くと花園（ハナゾノ）とも読まれ何だか固有名詞であるような感じもあるのでこの苑の字を借りて来たのである。[19]

「花苑都市」すなわちレジャー施設と「田園都市的庭園本位の町」の結合を特徴とした郊外都市のイメージは、二〇世紀初頭、我が国において都市計画の一分野に成長していた。この背景には明らかにハワードの田園都市運動、内務省地方局による「花園農村」の構想のみならず、佐多愛彦大阪医科大学長・都市計画大阪地方委員を先頭とした大阪の名医グループの健康地についての多彩な「情報」の影響があったとみて差し支えないだろう。三崎省三社長による甲子園開発は甲子園球場、阪神パーク、甲子園ホテル、水族館、海水浴場そして住宅地、広場、遊戯場、園芸場など整然とゾーンニングされた庭園本位の町等の総合的デベロッパー事業であった。一九二四年八月一日、東洋一の甲子園大運動場が完成した。同年八月第一〇回全国中等学校優勝野球大会が、その会場を前述した鳴尾から甲子園に移して開催された。甲子園球場は中等学校野球を国民的行事へと発展させ、甲子園の名を全国にとどろかせた。一九二八年七月、甲子園住宅地の分譲が始まった。狐狸の里に出現した「花苑都市」そのものが有利な商品となり、中産階級上層の人々に健康と安らぎを提供し、新しいモダンな生活スタイルがつくりだされた。郊外住

宅地の住民の元気な生活への欲求や、田園趣味さえもが、利益を得る源泉となり、沿線における新しい事業をつぎつぎと生みだし、私鉄経営に投資の新しい機会を開かせることになった。

第三章　大阪近郊の結核療養所と『松之浜寺』

「サナトリウム」と称される大阪湾岸の白砂青松の景勝地、須磨・浜寺の結核療養所を考察するならば、そこには極めて特徴的な事実があったことを知るであろう。即ち、これは関西における公衆衛生の先進性を示すとともに、更に当時の一般大衆の公衆衛生の知識の貧困をも知るであろう。「サナトリウム」とは大気・安静・栄養という療養の三原則にしたがって、海岸・林間・高原等に造られた結核療養所であるが、単に結核治療の一時的手段ではなく、一生涯を通じて行うべき正しい生活を教える場所でもあった。ヨーロッパ諸国では産業革命に関連して結核死亡率は著しく上昇した。このためヨーロッパ各国では国家的或いはブルジョアの慈善的或いは赤十字事業として、サナトリウムの建築が進展し、二〇世紀初頭、ドイツのみでも一〇〇に達する勢いであった。では、我が国におけるサナトリウムのルーツは何時、誰によって建てられた結核療養所であろうか。一八八七年、緒方洪庵門下の医学者で医学教育の振興と医事制度の整備に功のあった長與専齋が鎌倉海浜院を創設したのが、最初の私立結核療養所ということになっている。[20] しかし当時の日本人は未だ海浜サナトリウムについての知識が無く、利用者は数少ない横浜在留の欧米人であった。このため経営は行きづまり、海浜サナトリウムは一八九〇年頃には欧米人のためのホテルとしての性質を増し、ついに鎌倉海浜院ホテルと改名した。この鎌倉海浜院に続いて、一八八九年、鶴崎平三郎兵庫県立姫路病院長が、天下の名勝の須磨浦北東の海光まぶしい鉄拐山腹に須磨浦療病院を創立した。鶴崎は、「ブレーメル・デットワイレル」の安静療法にしたがって、治療に従事した。この療法は患者に対する厳重な医師の医学的監視の下、空気療法、湿布摩擦とシャワー等を利用した水療法、栄養療法等を綜合的に行うものであった。彼はまた須磨海岸が海浴場として好適であることに注目し、自らも浴したのみならず、海水による皮膚の摩擦を世間に推奨した。前年には兵庫－姫路間に私鉄山陽鉄道（現在の山陽本線の一端）が開通した。山陽鉄道の開通にも拘わらず、鎌倉海浜院と同様に経営は当初から困難を極め「株主の不平の声屢々聞こえて如何に苦心焦慮せしも意ならぬ」状況となった。[21] 当時鶴崎は眼病にかかり、ほとんど読書が不可能であったが、新しい医療情報を摂取するとともに、病室の一間に妻規矩子とともに起居して困苦にたえ経営の立て直しに努めた。気骨と信念の持ち主の鶴崎は、仁業たる病院から営利主義を排しなければならないとして、株式組織を解散すると同時に極力資金を借り入れ個人経営とし自ら院長となった。約一万坪の敷地の整備費、診療所、病院、薬剤室、看護師室、消毒室、炊事場等の建築費、医療器具の購入費等のすべてを自己資金でまかなったのではない。いわば篤志家の寄付もあっ

たが、自ら借金を背負ってのスタートであった。

『須磨浦療病院経済の状況　大正七年十月調』には次の如きことが言われている。

大正二年より六年迄五箇年平均を以てすれば入院者一日平均四十二にして入院料に依る一日収入金八拾四円、一箇月二千五百二十円となり、外来患者薬価一日金二十円一ヶ月六百円となれり。而して一箇月の経費は平均二千百円を要し、差引金一千二十円を余すも副院長手当交際費及夏冬職員手当等を差引けば院長純収入は僅かに四百円に足らず。是を以て年々建造物其他の設備を償却し、数年の後は全く廃頽に至るべきものに対しては今より再築準備なかる可らざるも、過重なる所得税を負担し、為めに是等償却するの方法さへ立兼ありしに、本年に至り計らず一千二百円の戦時利得税を賦課せらる。当院の前途実に暗澹たるものあり。(22)

一九一八年といえば須磨浦療病院創立の時期から数えて二九年位経過した頃のことであるが、此処に記されてある病院経済はほとんど順調な経営を維持しえていないものとして、二〇世紀初頭の私立結核療養所の経営自体の実態を垣間みるに足る資料であろう。戦時利得税一二〇〇円が賦課されると、病院経営にほとんど余裕はなく、このままでは早晩正岡子規や倉田百三が診療をうけた全国的に著名な須磨浦療病院も廃業の止むなきに至るのは必至であったことを知るのである。

須磨浦療病院の経営は前述のように当初から借金を背負ってスタートし、約二九年が経過しても可成り不安定であった。それでも二〇世紀初頭の頃になってくると、その名声は国内に拡がり、全国から多数の患者が蝟集した。一九〇二年、北は堺に隣接し、西方一帯は大阪湾に面した浜寺海岸に、石神亨大阪痘苗製造所長・石神病院院長が結核療養所として石神病院浜寺支院を開設した。浜寺も須磨浦と並ぶ白砂青松の景勝地で、平安時代から歌人の吟に上り、高師浜と呼ばれた。つぎに簡単に石神の経歴を紹介しておこう。石神亨は一八五七年熊本県玉名郡山北村に生まれた。熊本公立病院で蘭医マンスフェルトに師事した。西南戦争に参加し、医術開業の許可をとり、大阪、京都に赴くも志成らず帰郷、一八七八年、熊本県南郷にて南郷病院を開業。一八八三年、海軍軍医候補生として横須賀海軍病院に赴任。一八八四年、東京病院（後の慈恵大学附属病院）に転じる。一八八七年、軍艦竜驤に乗艦しオーストラリアに渡航中、アデレード市慈恵病院を視察し、大いに感じるところがあって、キリスト教を信奉する。彼は入信の動機をつぎのような言葉で説明している。

顚狂院を参観したが、患者の多数は施療にて又有料のものも少なくない……金持ちの人が身分相当の金を払って貧乏なもの

の助けをするのは当然の話ではないかと云われ、余は一言を発し得ず思わず赤面した……今濠州に来り見れば凡ての道徳の源を神を畏れ敬い人を愛すると云う点に置き修養に修養を積み訓錬に訓錬を重ねて居る、故に動もすれば放縦に流れ易きこの僻遠の植民地に於いて猶且斯の如き秩序と斯の如き美しさを見るのである。……茲に於いて遂に断然生来の嗜好物たる酒を止め一身を献げて神に仕へ様と決心するに至ったのである……。[23]

当時、我が国は上下を通じて条約改正、治外法権撤廃の議論が沸騰していた時であったが、すでにこのようなすぐれた考えの下に、国の将来を真剣に憂いていた人がある以上、もはや詳しい説明は必要ではないだろう。要は石神による自力での結核療養所設立の基調には、キリスト教の奉仕の精神が確固として存在していたということである。鶴崎と石神はともに強い志を持つ医師として、創設当初からその前途に幾多の困難が予想される結核予防事業に敢然と船出した。二人ははっきりと医学が何を為すべきかを認識していた。私はこのあたりに鶴崎と石神が海浜サナトリウムの先駆者となった秘密を見る思いがする。関西における結核予防の第一人者である鶴崎と石神による海浜サナトリウムが、結核治療や結核予防に関する知識の普及に貢献し、須磨、浜寺が我が国の結核治療の重要な拠点となったとすれば、それは直ちに大きな誹謗、中傷を呼ぶものであった。特にそれが尖鋭な形をとってジャーナリズムに登場してきたのは、一九〇四年、吉弘白眼『松之浜寺』（吉岡宝文館）の出版である。吉弘は土佐の人、中江兆民の弟子筋にあたるという。当時、浜寺に住み本書を執筆した。彼が主筆であった『大阪日日新聞』（夕刊）は暴露記事を売り物としていた。関西経済界革新の一方の旗頭であった、岩下清周北浜銀行頭取の北浜事件による失脚は、吉弘による『大阪日日新聞』を使った攻撃の結果であった。高崎親章大阪府知事、土居通夫商業会議所会頭、山下重威衆議院議員、三谷軌秀府会議長、日野国明市会議長等の名士たちが『松之浜寺』に序文を寄せた。彼は「南海鉄道は花鳥風月の使者なり」という言葉ではじまる美文調の文章をもって、観光鉄道としての南海鉄道を印象づけるとともに「（浜寺）公園保護」と「浜寺全体の繁栄」策を明らかにした。だがしかしこの書の最大の特色はたんなる観光案内と振興の書の類ではなく、都市政策的視点から郊外生活を評価したところにあった。第一章で述べたように田園都市構想の先駆的書物がすでに刊行されていた。一八九八年に刊行されたエベネザー・ハワードの著書である。この魅力的な書物とほぼ同じ時期に刊行された『松之浜寺』において「田園生活を営める沈着の世界」を推賞したとしても、ハワードの田園都市論からの直接的影響はみられない。その意味では、『松之浜寺』は都市環境の悪化対策上から田園生活と公園の活用を独自に論じた書物であった。さらに言えば同書は都市政策的視点から煤煙による大気汚染の害をこうむっていた大阪市民に郊外生活の利益を説明した一種の経世論と言うべきであろう。かく考え来

ればこの時期すでに大阪市民の間に田園生活への憧れや、田園趣味が成長しつつあったことを物語るものである。

しかし吉弘がいかに郊外電車の完備と堺、浜寺への水道供給を説き、いかにこれを大阪市に勧告しようとも、つぎのような須磨、浜寺の二つのサナトリウムへの誹謗、中傷の文章を読むかぎりでは、どうして吉弘が自らの立場を「社会主義的天職」と言うのかまるでわからない。[24]

須磨にて鶏卵を購うは極めて危険なり、何となれば須磨の家鶏は大抵其来りて病を養える多数肺病者の吐棄したる腫液を食へる処あれば其の鶏卵は絶好の肺病伝染の媒介物なればなり……実に須磨は海に急潮悪魚の危険あり、陸に肺結核菌の充満せる危険あり……然らば浜寺の地も亦た早晩此等の伝染病者に占領せられて、音に名高き高石の浜も不健地と為るの虞なきか……今日の浜寺に石神病院あるは慥かに痛心すべき白避の微瑕なり。仝病院は比較的設備の完全を以て病毒を他に伝播せしめざる注意に遺算なきを期するとは雖も、其の収容せる患者の園内を散歩して不用意に喀啖を吐き棄て、或いは松林に憩い、或いは海浜を逍遙するを禁止することは到底不可能なるべし。……故に浜寺の為に謀りて石神病院の他に移転するを希望することは常情ならんも吾人は仝病院長の人格を信じて、暫らく移転を主張せずして、収容患者外出の際に於ける予防法を励行せんことを切望して已まず、[25]

『松之浜寺』に描かれた吉弘の言葉には、公園や電車内での喀痰を極度に恐れていた当時の社会状況が反映している。『松之浜寺』が世に受け入れられた背景には、二〇世紀初頭の社会における公衆衛生の知識の欠如とマナーの貧困があった。大阪医学界や医師界にとっては、前述した如き官による「肺結核予防細則」の発令のみにとどまらず、新しい民間の結核予防のための啓蒙機関の創設ということが重要な課題になってきたのである。それ故に石神、佐多、緒方、高安等の名医グループが先頭に立って、一九一三年二月、大阪結核予防会を設立したのも、極めて理由のあることだった。大阪結核予防会は翌三月、大久保利武大阪府知事に対して、つぎのような建議書を提出した。

明治三十七年四月大阪府令第三十七号肺結核予防細則第一条に於て、唾壺を備付くべき個所を規定相成候処其中に公園地及び電車内の二項目なき事は今日の時勢に照らし結核予防上大なる欠陥に有之候様被考察候。就ては同細則第一条に右二項目を御追加の詮議相成度本会の決議に基き建議仕候也。[26]

大阪結核予防会の会長には大久保利武大阪府知事が就任し、事業としてつぎのようなものがあった。一・結核予防を目的とした出版、

講演等による啓蒙活動。二・市内スラム街の結核患者の調査。三・小、中、女学校等を対象とした健康教育。また一九一三年には、日本結核予防協会が発足し、同年、国際結核予防協会にも加盟している。すでに一九〇九年、開院していた日本赤十字社大阪支部病院は、同年、大阪結核療養所新設を計画した。大久保大阪結核予防会会長による結核予防施設の調査立案の依頼をうけて、ただちに石神常務理事が専任で調査にあたった。その結果、従来医療を受ける機会に恵まれなかった重症患者の隔離療養を目的とした結核患者療養所の設置が決められた。大阪結核予防会直属の結核患者療養所は翌一九一四年に開設され、貧困の重症結核患者を収容し施療した。

問題は既に明らかなように、二〇世紀初頭の大阪は結核予防において、全国都市の中でも最も先進的な都市であった。そしてこの場合の大きな理由は、既にみた如き石神―佐多―緒方―高安の線に連なる大阪の名医グループの卓越した指導性にある。一九一五年、内務大臣は大阪市に対して全国に先んじて、公立の結核療養所（市立刀根山病院）の設立を命じた。当時は第一次世界大戦当初の経済界の不況時代であり、従って市財政も豊かではなく、三五〇人も収容する療養施設設置は、仮令国庫補助があるにせよ容易な事ではなかった。関一助役は敢然と時の池上市長を助けてこの創立委員会を組織し、佐多愛彦等斯界の第一人者の専門家を委員とし、自らその会長となり、調査研究に努めた。大阪市立刀根山病院はかくて我が国結核予防法による最初の公立療養所として、箕有電軌（現阪急電鉄）沿線蛍ヶ池の東刀根山丘陵に設立され、一九一七年九月二〇日、事業を開始した。刀根山病院の設立は、本質的には関―佐多による病院構想の理想の中から考えるべきであるが、それが特にこの病院の特徴として現れていたものは、「治療にのみ着眼せず、研究にも重きを置き、研究室の設備、試験動物室の附設等殆ど一個の結核研究治療院の理想を実現」[27]したことである。刀根山病院は研究設備だけではなく、病室の暖房設備も時代の尖端をいくものであった。当時では、無料、お仕着せの病人を収容する病院に暖房設備などは贅沢の極みだと、市会はもとより、理事者もそう考えていた。しかし佐多が、「現代暖房なき病室は病室ではない」と主張し、関助役や天野府衛生課長もこれを支持したので、暖房設置が実現したという。[28]この件を語る有馬頼吉の文章では、更に佐多の主張―医師所長制のことにもふれているのであるが、これを二〇世紀初頭、未だ官尊民卑の思想が主流であった社会の中において考えてみればよいのである。関助役や佐多大阪医科大学長等の病院構想がどんなに革新性をもったものであったかは、説明をくり返す必要もないであろう。二〇世紀初頭、大阪湾沿岸及び大阪近郊における結核療養所の設立は、これを単純に地域の結核予防対策の表象として片付けてしまうことは正しくない。それはまさしく「大阪の空気は東京よりも遥かに自由であって経済上の活動力は東京は大阪に及ばない」（関一「大阪の現在及将来」『大阪文化史』、大阪毎日新聞社、一九二五年）と言い切った関大阪市長と、大阪の名医グループ、そして大阪市民の自治精神

の発露であったし、衛生自治の基盤の形成の客観的条件でもあった。

むすび

一九一九年の道庁府県肺結核死亡比例表によると、各道庁府県における「人口一万ニ付肺結核死亡率」の第一位から第四位までは、それぞれ以下の通りである。一位東京三一・二、二位神奈川二三・八、三位京都二二・〇、四位大阪二一・八。[29] 一九一九年は我が国初の結核予防法公布の年である。当時燎原の火のように広がる結核患者の増加と死亡率の上昇に直面していた大阪市は、関一助役―佐多愛彦都市計画大阪地方委員等を先頭に「田園都市」「花園農村」「郊外の健康地」というテーマをとりあげ、公衆衛生＝結核予防と一つになった総合的な都市空間の「衛生化」構想を推進していた。従来、我が国の学界では初めての田園都市レッチワースに象徴される田園都市運動が我が国に与えた影響について考察した様々な領域の研究が数多く存在している。ここで再びくり返すと、拙稿が明らかにした如き、公衆衛生と田園都市との結合という枠組みで、二〇世紀初頭における結核予防、環境共生などの側面から大都市圏のリニューアルについて再評価した研究は寡聞にして知らない。公衆衛生と都市環境相互の間におけるつながりは、拙稿が示したような方向で深めていくことによってその具体的な相を、一層明らかにするであろう。公衆衛生と結びついた都市と郊外居住の問題については、なお考察すべき多くの課題がある。他日、あらためて課題を深く考え発表する機会をえたい。

本稿は二〇〇七年三月一七日、国際日本文化研究センターの共同研究における私の報告―「我国における田園都市と公衆衛生―結核予防対策を中心として」を、大幅に増補改訂して作成した。あらためて同共同研究会から、論文の構想をたてる自由と機会、そして刺戟をお与え頂いたことに感謝したい。

坂口診療所坂口知香子先生から数多くの資料の提供を受けたことを感謝したい。

凡例

一．用字・用語は、原則として常用漢字、現代仮名づかいを用いた。

二．年号は原則として、西暦とした。

注

(1) ルイス・マンフォード「田園都市理念と現代の計画」、E・ハワード、長素連訳『明日の田園都市』、鹿島研究所出版会、一九六八年、五五頁。

(2) 竹村民郎『笑楽の系譜―都市と余暇文化』、同文館出版、一九九六年、竹村民郎『大正文化　帝国のユートピア―世界史の転換期と大衆消費社会の形成』、三元社、二〇〇四年、竹村民郎・鈴木貞美共編『関西モダニズム再考』、思文閣、二〇〇八年を参考にされ

たい。

(3) L・マンフォード『都市の文化』下巻、生田勉、森田茂介訳丸善株式会社、一九五五年、四七一頁。

(4) 関一『住宅問題と都市計画』、神戸都市問題研究所編『地方自治古典叢書』6、学陽書房、一九九二年、二六六～二六七頁。

(5) 山上正厚「秀逸第二席懸賞論文大大阪の建設に就いて」『大大阪』第三巻第六号、一九二七年、二八～二九頁。

(6) 新修大阪市史編纂委員会編『新修大阪市史』第七巻、大阪市、一九九四年、一七頁、三六頁。

(7) 『大阪朝日新聞』一九一四年六月二六日付。

(8) 小松良夫『結核―日本近代史の裏側』、清風堂書店、二〇〇〇年、一四〇頁。

(9) 佐多愛彦「都市と田園附市外生活の幸福」高田兼吉編『市外居住のすゝめ』高田兼吉、一九〇八年、一三～二一頁。

(10) 緒方銈次郎「住居撰定の条件」前掲書、八一～八三頁。

(11) 堀見克礼「市外居住に就ての希望」前掲書、一六〇頁。

(12) 高安道成「市外居住の利益」前掲書、七九頁。

(13) 石本美佐保『メモワール・近くて遠い八〇年』、岩波ブックセンター信山社、一九八四年、六頁。

(14) 鈴木貞美『生命観の探究』、作品社、二〇〇七年、三六四頁。

(15) 『郊外生活』第一巻　第一号、阪神電気鉄道株式会社、一九一四年、九～一一頁。

(16) 山下惣一『身土不二の探究』、創森社、一九九八年、一〇七頁。

(17) 柳田誠二郎『岡田式　静坐の道』、地湧社、一九八四年、八九頁。

(18) 日本経営史研究所編『阪神電気鉄道百年史』、阪神電気鉄道、二〇〇五年、九二～九三頁。

(19) 『建築と社会』第九集第一二号、日本建築協会、一九二六年、二三頁。

(20) 福田眞人『結核の文化史―近代日本における病のイメージ』、名古屋大学出版会、一九九五年、二五一頁。

(21) 鶴崎範太郎・鶴崎隆一『須磨浦病院創立一〇〇年』、須磨浦病院、一九八九年、二七頁。

(22) 前掲書、一五六頁。

(23) 石神研究所同窓会編『故石神亨紀念誌』、石神研究所同窓会、一九二一年、七七～八〇頁。

(24) 吉弘白眼『松之浜寺』、吉岡宝文館、一九〇四年、二一〇頁。

(25) 前掲書、一〇五―一〇六頁、一一三～一一五頁。

(26) 村上栄次編『大阪衛生百年史―大阪府衛生会・健康の里の軌跡―』上巻、大阪府衛生会、一九九四年、二八〇頁。

(27) 高梨光司『佐多愛彦先生伝』佐多愛彦先生古稀寿祝賀記念事業会、一九四〇年、四二五頁。

(28) 有馬頼吉「懐旧」大阪市立刀根山病院編『昭和十二年　大阪市立刀根山病院二十年史』、大阪市立刀根山病院、四頁、所収。

(29) 大原社会問題研究所『日本社会衛生年鑑』(大正十一年)、大原社会問題研究所、一九二三年。